

器の壺を見たことがある。二十種ほどの小壺で肩の処に孔が一つあけられていた。器全体に赤い朱か、または酸化鉄がついていたのを記憶している。その当時は、何の気なしに簡単な実測図を作っておいた。昭和五十九年に『別府市誌』の第三編「別府の歩み」の第一章「ふるさとのあけぼの」を書くため、その実測図を大騒ぎして家さがしたが、どこにしまったか不明であった。この土

ヒゲゴという名のカゴ

日名子 洋 一

古語とカゴ ヒゲゴという何を想像しますか。

実は、竹のヒゴで編んだカゴの古語です。古語のカゴ（万葉仮名）には、カタミ（加太美）・シタミ（之太美）・イカキ（以加岐）等がありますが、また語尾が〇〇コ（または〇〇ゴ）と呼ぶカゴも多いようです。参考までに、古語のイカキとは蜘蛛の巣の意味です。ザルの一で菊底の編目が蜘蛛の巣に似ていることから転化してイ

器こそ、日本最古の水銀精錬の釜ではないかと考えられる。現在でも柴石の赤泥の層から発見された土器や壺を保存しておられる方をご存じの人は、ぜひご教示を賜りたいと思っています。

それは、別府市の古代が宇佐神宮のみならず、日本の鉱業史の上から、考古学的にも重要な意味をもつ大切な遺物であるということからである。

カキといっています。

語尾にコをつくカゴの例は、奈良時代の正倉院の御物の花筥けごがあります。この浅型の花筥は年代記録が天平勝宝九年（七五七）で、わが国最古のカゴとされています。同じ時代の東大寺伝来といわれる全球型の華籠けごも違う漢字を書きますが、やはりケゴといえます。

このほかに、日本書紀の無目籠むめこ、古事記の八目荒籠やちこ、

源氏物語の薰籠・鬘籠等が語尾にコをつくカゴです。

本稿はこの古語のカゴのうち、郷土の史料に記載されたヒゲコについて分析し説明しようとするものです。

大友と鬘籠 近代以前のわが郷土のカゴの史料は僅かに二冊です。その一冊は江戸初期の貝原益軒の豊国紀行にあるショウケです。ショウケの研究は別稿で詳しく述べる予定ですが、今一冊が鬘籠の大友家中行事記です。大友家22代は、鎌倉から戦国時代（一一九三―一五九三）まで続き別府関係の史跡や古文書も多くあります。

この鬘籠の史料は、郡制廃止記念に編纂された「速見郡史（註1）」の中の大友家中行事記が二カ所に収録されています。その第四章第二節第二款に次の「**椀飯の規式**」があります。

（中略）三月三日諸大名より**椀飯**を奉る、山家より椀飯は雉子・山鳥・小鳥・兎・狸いづれも百宛、長き木何本にても付て、木の継目を菅人扇にのせて出る、（中略）菓子**は各鬘籠百宛**、又海邊よりの椀飯は、魚百宛揃、（中略）木類多に付て其継目々々一人宛持て廣庭に出て、三返廻り作法を調て、何も御

臺所へ納る。五月五日椀飯規式右同断。六月朔日椀飯規式同じ（中略）

と述べている。

これをカゴ中心に要約すると①このヒゲコ自体がプレート（貢進）ではない。②菓子の種類は不詳ですが、中に入れたその菓子が見えるようにヒゲコが容器として使われた。③パーティ（椀飯規式）の前段でのセレモニーにとしてヒゲコが用いられた等になります。

室町から平安 この大友家の風俗を速見郡史は、その第三章第二節第四款第二項で次のように解説しています。

（中略）武家が斯る節日の貢進を受け、椀飯の饗禮に預るは国史眼にも足利義満の事を記し「義満数々管領国持の邸に臨む、是の後相沿ひて例となり、毎年正月日をトし將軍、三管領及び赤松・山名・京極の邸に臨み、椀飯の饗を受け、其費を諸国に課し国錢に准ず、武家の大饗禮たり」と云へば、此項より一般の風となれるを知るべし。此節會は往々民間にても行はれ、現今檀中が汁椀とて講中に僧侶を饗応するの風あるは皆此意なるが如し。（中略）

と、国史眼（註2）を引用して室町初期の足利義満（一三五八〜一四〇八）当時すでに椀飯儀式が附加税の性格をもって実在し、さらに庶民間にも汁飯行事を関連するとして説明しています。

続いて、速見郡史は、同項に次のように武家の行事の前に朝廷行事があったことを指摘しています。

（中略）元朝廷の大嘗会後に行はるゝ辰己兩日の節（中略）悠紀・主基兩國より献る多米都物、若くば鮮味に做ひたるものなるべし。多米は即ち美味の意にし、之には酒・鮑・鮭・千鳥・雉・鶉・堅魚・雑魚・鮭鮓・醬等を献り、鮮味は雉を梅ヶ枝に附けたものと、密柑と栗とを鬚籠に入れ松枝に附けたるものにて、献国の国司並膳部、行事の辛に率ゐられ、之を執りて庭中に出で献ずるを常とす。（中略）

と以寧郷記や台記（註3）等を引用して、武家の行事と違つて朝廷では、天皇即位後初めての新嘗祭（大嘗会）で大規模な不定期年の行事だったものが起源となっています。

これをヒゲコ関係で要約すると①鬚籠に入れる品名は、

大友家の菓子だけに對し密柑・栗と多い。②鬚籠に結びつける棒が優雅にも松枝にかわっています。

源氏物語とヒゲコ 文学の面でも、この朝廷の行事を裏付ける資料として源氏物語があります。古語辞典（註4）を抜粋すると、

北のおとどより（中略）ひげこども（中略）奉り給へり

とあり、源氏物語第23巻の「初言」に鬚籠が登場してきます。作者の紫式部（九六六〜一〇一六）もヒゲコを知っていたことは、大嘗会以外にヒゲコを使う習慣が貴族間であったことになります。

現在は合成樹脂やネットに変わってしまったが、今から四半世紀前までは病氣見舞の果物籠や駅弁売りの身竹ヒゴ（普通は皮竹ヒゴ）を使った密柑籠と違つて中世は風流なイメージが強調されているようです。

鬚籠か鬚籠か これまで片仮名でヒゲコと書いたり、漢字で鬚籠とか鬚籠と三つで表現してきましたが、ヒゲについて少し分析してみましよう。

クチヒゲ↓髭。アゴヒゲ↓鬚。ホホヒゲ↓髯。

髭は鼻と口の間に生えますがその手入れには口幅部分は短く、両口幅をこえる部分はピンと上げるか長くぶら下げるでしょう。これに対し、鬚も短く刈り込んだり、長く伸ばすこともあり、どちらも一定していません。

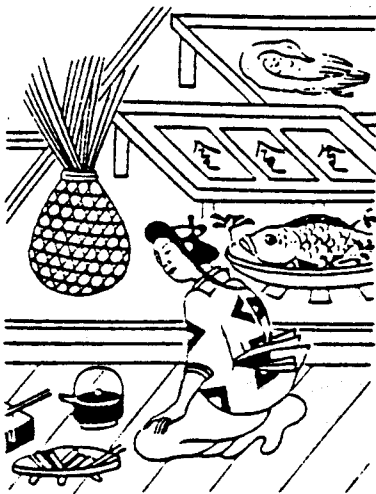
ヒゲコのヒゲにはどちらの漢字を使うのが適切でしょうか。カゴの部位を示す通称は、下から底・腰立ち・腰・胴・口・耳・手などと呼んでいます。カゴの縁はこの口ですから、口の回りのヒゲの漢字の髭・鬚のどちらにも形容できる要素があります。

前述の古語事典に鬚籠ひげこと表現して、さらに別名を「どじょうかご」と指摘しています。しかし、ドジョウウのヒゲはクチヒゲの髭のようです。どちらにせよ、表現する人びとの主観性や慣習で両方の漢字が使用されているようです。そこで、本稿は、史料の引用以外にはヒゲコと片仮名で表現します。

ヒゲコの原形 カゴの規格や寸法は商取引上一応きまっています。誤差の許容度が大きいようです。これはハンド・メークの特徴で工芸的に個性も主張できますが、反面ミクロ単位の精密度の量産可能性については短所に

なります。しかし、ヒゲコも中に入れた菓子・密柑・栗の種類に応じて自在に形状が変わったことも推測されます。またユーズアの観点から、ある用途に使っていたカゴ（原形）を別の用途に利用していると、使い易いようにカゴの形状が原形から変化するものです。そこで、ヒゲコの原形の資料として前述の古語辞典から次のように抜粋してみました。

ひげこ（鬚籠）（名） 竹で編み、編み残しの端しを、ひげのように出して飾りとしたかご。今は贈り物を入れる容器に用いるほか、五月の節句に立てる幟の頭につけたりする。どじょうかご。ひげかご。



ひげこ 〈伊曾保物語〉

この資料のうち、「贈り物を入れる容器」については近代には提手をつけて針金で止めヒゲをなくした縁に変形し、最近では合成樹脂製のネット型密柑袋に変形していることは理解できるでしょう。

また、五月の端午の節句に立てる「幟の頭につけ」について考察しましょう。まず、「幟」とは大相模や歌舞伎の力士名や俳優名を染め抜いて戸外に立てる旗の意味です。今でも農村で鐘旭様や義経等を染め抜いた幟を見かけます。

ところが「頭につけ」とはポール（竿）の先端につけることで、今のデパート等で売っている鯉幟の矢車が一般的です。この景気がよいが騒音になりかねない矢車に対して、自給自足的なヒゲコ（西日本が多い）や杉の葉（東日本が多い）の頭が少数となっているのが現状でしょう。この幟の竿頭につけたヒゲコと菓子等を入れたヒゲコの原形としての前後関係はさらに今後の研究が必要になります。

もう一つヒゲコの原形を推理してみると、籠松明かごまつあきになるでしょう。昔の籠松明は、かなり需要があったはずで

す。その製法は太いマダケの先端を数本に割り中に松脂まつやにを塗った木片を入れカツラで束ねてその先をヒゲコ状にして作ります。

今も籠松明の伝統は、各地に残っています。特に、籠松明が伝承されている行事は、毎年三月一二日の奈良東大寺二月堂のお水取りが有名です。また、別府の近郊でも六郷満山で知られる国東半島各地の「修正鬼会」の行事に伝統として残っています。

ヒゲコの工人と産地 大友のヒゲコの工人の推理は、前述の籠松明のようなカゴといえない原形から進歩したという仮説から類推すると、当時は農民が七七八割でしたから器用な農民なら習練すれば技術的には可能になります。しかし、当時の需要頻度から考察すると工人生産と見るべきでしょう。この工人の存在を当時の別府湾奥の要因から類推しますと、

(1) 大友居館のあった大分市域は陥没で知られる瓜生島の地形のように遠浅海岸であったようです。

(2) 大型船の寄港地浜湧浦の存在は、真偽はともかく大友初代と22代の両方に史料があります。

(3) 浜脇台地には大友別館跡もあり、ヒゲコに限らず

別府市域に入湯客のカゴ需要が予測できます。

(4) 前述の速見郡史の京都からのヒゲコ伝来説から下

洛時の武家・船頭がヒゲコを持ち帰ったか、彼ら

の口述により地元工人の再製も推理できます。

の諸事項から仮説をたてることができても確証がない。

また、大友当時のカゴ産地の可能性については、

(1) 別府周辺の竹の植生は、台地や山にマダケ林と、

海岸や平野にマダケ林と標高差特性がみられます。

(2) 昭和初期の大分県下小規模カゴ産地の地形特徴(註

5)は、マダケ林の点在する谷筋にあります。

(3) 明治期の別府大規模カゴ産地の地形も朝見川支流

(河内川・山田川)の扇状地といえます。

と産地形成を考察してみました。これらを実証する史

料があまりにも不足しています。

ヒゲコの生産工程 ヒゲコを技術的に分析する資料とし

て前掲の古語辞典の挿入図があります。これは縦50×70

センチの巾着型きんちやくをして、ヒゲのもとを竹枝で結び、編目

の隙間が荒い図です。この図を基本に推理してみましょ

う。

先ず現在のカゴの生産工程は、大別すると次の順序に

なります。

①準備(材料づくり等)工程↓②編組工程↓③縁仕

げ工程↓④塗り・染色工程

今の工人は美術作家・伝統工芸士は勿論殆んどの技能

者がこの四工程を一貫してひとりですり処理します。しかし、

昭和初期までの量産同形カゴの工程は、爺ちゃんが縁仕

上げ工程、父ちゃんが準備工程、母ちゃんと子(弟子)

が編組工程と分担するパターンが主体だったようです。

勿論編組のチェックは父ちゃんの役割です。この例は技

術の習得難易度を単的に表現しています。カゴの生産工

程の技術難易度は、③↓①↓②の工程の順序になるとい

えるでしょう。もう一つはカゴの損壊部位が縁に多いと

いう技術的なこともあります。

これらの工程からヒゲコを考察するとヒゲコは高度な

技術を必要とするカゴではないようです。むしろ、一度

きりの使い捨て贈呈容器の使命のために労力を節約した

生産工程として縁の形がヒゲになったと推理できます。

ヒゲコの編組技法 最後に、ヒゲコの編目について考察
しましょう。編組技法を昭和42年の全国工芸連合部会の
編組統一用語（註6）で説明すると、カゴの編目は96種
類で8系統に分かれます。この8系統のうち隙間の荒い
あじろ
網代・ござ目・縄目・菊の4系統は、ヒゲコの対象にな
りません。残り4系統43種類について分析してみますと、
次のようになります。

(1) ヒゲコの構造から四つ目系の「四つ目」か「菱四
つ目」が指摘できます。四つ目系でも複雑な編目
は無理でしょう。

(2) 六つ目系の「六つ目」も有力でしょう。ただ四つ
目系がヒゴ縦横二本の交差の基調に対し、六つ目
系はヒゴ右斜め・左斜め・横三本交差で六角形の
間隙を基調としています。この点ヒゴを多く使い、
手間がかかるの二つの難点があります。

(3) カゴを最短時間で編める技法は六つ目系の「みだ
れ」の変種の四海波（別府の地方名・註7）です。
しかし、この特徴は縁が共縁の波型ですからヒゲ
コの対象外でしょう。

(4) 輪孤系や八つ目系の技法は高技術ですからヒゲコ
に該当する可能性は少ないといえます。

おわりに 現存しないヒゲコをテーマとして本稿の前半
は速見郡史を中心に少ない史料から分析し、後半のヒゲ
コの原形の項以降でカゴの現況との比較の観点から仮説
や大胆な推理を展開しました。ヒゲコの研究も多くの人
びとの協力により達成されるもので、本稿はその端緒に
過ぎません。この点付記してヒゲコ研究の進展を期待い
たします。

註

- 1 志手環「速見郡史」大分県速見郡教育会 大正14年
- 2 重野安積ほか「国史眼」
- 3 藤原道長・記「台記」
- 4 守随憲治ほか「古語辞典」旺文社 昭和40年
- 5 地形特徴は大分県別府産業工芸試験所の早野久雄
前所長の見解では宇佐市麻生、安心院町、院内町、
庄内町、三重町、竹田市と指摘し、工藤員功氏かずよしはそ
の著書（「あるくみるきく」日本観光文化研究所・

一九三五・五・No.75)で三光町佐知、宇佐市山口、豊後高田市、杵築市、大分市の野田・宗方・胡麻鶴等の谷筋産地をあげている。

6 編組統一用語は、その後次の図書で複製された。

日本工芸技術協会「編組」デザイン資料 昭和53

年3月

地頭竈門氏について

土屋 公照

述べてみたい。

竈門荘の成立

源平の争乱を書いた「元暦文治記①」という本の中に竈門荘の成立について、次ぎのような記述がある。

一 寺領之事 豊後国南北浦部十八ヶ所 此内竈門

荘百町者 聖武天皇天平勝宝元年己丑六月二十

日被載宸筆御起請文畢 最初御奉寄之間 異干

「内竈」と呼ばれている地名字がある。亀川にある国立別府病院・亀川小学校・亀川駅など新川以北はほぼ大字内竈である。此処の地名は本来は「内竈門」であった。その地名の意味するのは古代・中世と宇佐八幡の神宮寺である弥勒寺の荘園であった「竈門荘」の中央部に位置するからである。

かって、鎌倉・室町・戦国時代にかけてこの竈門荘を中心に勢力を張った豪族竈門氏や竈門荘について考えを

7 四海波は、毎年四月上旬朝見神社の拝殿で行う竹まつりの「献籠の儀」に使うため神楽殿で白装束の工人が青竹で作る四つ目底の大型カゴです。又観光宣伝の竹カゴ教室でミニチャーの四海波が教材になっています。